



TITLE:

## 第18回岐阜外科集談会

AUTHOR(S):

---

CITATION:

第18回岐阜外科集談会. 日本外科宝函 1962, 31(4): 683-684

ISSUE DATE:

1962-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/205451>

RIGHT:

## 第 18 回 岐 阜 外 科 集 談 会

昭和37年 2月28日 於 岐阜医大

### 1. 肺アスペルギルス症の一切除例

国立療養所日野荘 井 上 律 子

近年、肺アスペルギルス症の報告がみられるようになった。私は、最近、肺結核と誤診して肺区域切除術を行ない、術後、切除肺所見から、肺アスペルギルス症であることが判明した一症例を経験したので報告する。

患者は、16才の女子で学生。33年4月集団検診で発見され、35年8月当荘に入院した。自覚的症状は全然なく、喀痰中結核菌も発病以来陰性である。胸部レ線所見で、左肺上野に fungus ball を認める。35年11月左肺 S<sub>1+2</sub> 区域切除術を行なった。切除肺所見は、比較的壁の薄い内径 2.0×1.5 ㎝の空洞があり、その内容は、菌糸塊で、Aspergillus fumigatus であることが判明した。組織学的には、空洞壁は纖毛上皮におおわれ、気管支拡張性空洞の形をとっており、細胞浸潤や結合組織の増生及び血管の新生・充盈等を認める。

尚、発病の成因について、考察を加えた。

### 2. 乳癌転移による病的骨折の 1 例

岐阜市民病院外科

米谷 淳, 安江幸洋

43才の女性。39才の時左乳癌で手術を施行した。1年8カ月、2年1カ月、2年5カ月後に左胸壁に米粒大及至豌豆大の再発を来し剔出した。2年9カ月、3年5カ月後に左頸部淋巴腺転移を来し淋巴清掃を行った。

4年2カ月後、マッサージ加療中左大腿骨骨折を来し、キynchャー釘による整復固定を行った。骨折部は破壊性転移巣で組織学的に乳癌転移である事を証明した。

骨折後約2カ月で、肋膜、肝転移を併発して死亡した。

病的骨折に対しキynchャー釘固定の如き髓内操作は腫瘍の拡大のおそれがあるが、又一方患者の苦痛を緩和する事が出来るので有意義であると思う。

### 3. 胸腰椎部砂時計腫の 3 例

岐阜医大第2外科

校条恒久, 山村 喬

最近我々は、脊髄砂時計腫2例を経験した。症例1は32才男子。両下肢知覚運動麻痺及激痛、左上腹部腫瘍。第12胸椎より第2腰椎に至る椎弓切除を行つたところこの部に硬膜外腫瘍を認め、これは左Th<sub>11</sub>~Th<sub>12</sub>、Th<sub>12</sub>~L<sub>1</sub>、の椎間孔を経て亜鈴状に後腹膜腫瘍に連絡している砂時計腫である事を知つた。組織学的には、Sympathicoblastomであつた。X線治療も効なく術後44病日にて死亡した。

症例2は、8才男子、軀幹及両下肢知覚運動麻痺を主訴とし、胸部X線写真では左上肺野に大きい腫瘍陰影像を認めた。椎弓切除手術により硬膜外腫瘍は左C<sub>7</sub>~Th<sub>1</sub>の椎間孔を経て従隔洞に向け延びていた。剖見により該腫瘍は左前従隔手拳大腫瘍に連続している事を確認した。組織学的には、Kleinsrudzellensarkomであつた。

### 4. 広範なる後腹壁血管腫の 1 例

岐阜医大第2外科

小林 明, 菅沼親彦

〔症例〕 30才, 女

主訴は左腰部腫脹。約2年前より、左腰部に無痛性の指頭大の腫脹に氣附いたが、特に腫大して来る事もなかつた。第IV腰椎高、左腰部に直径約4cmの円形膨隆を認め、皮膚に異常着色を認めない。

〔手術所見〕

第III腰椎棘突起の高さで、腸骨稜に近く、腰背筋膜の上に、直径約4cmの暗赤色、扁平な表面不平等、結節状、境界鮮明、硬度軟の血管腫を認めた。此は、腰部三角で、側腹筋群の内側を通り、深部後腹膜腔へ広がり、ここで、上方は肋骨弓、下方は、骨盤腔内へ、前方は、臍附近にまで広がつて居り、全摘出は出来なかつたが、出来るだけ切除した。

本症は、Grant等の集計によれば、1928~1950年の間に、6例を数えるのみ。

### 5. 若年者胃癌の 1 例

木曾川病院外科

渡辺 克, 太田博造

〔症 例〕

患者は26才男子で約一年前から空腹時に心窩部痛を訴え、内科的治療で一時軽快していたが約2カ月前から腹部膨満感を伴う様になった。レントゲン検査で小彎側略中央に拇指頭大のニッシエをみとめ手術の結果、同部に鳩卵大の腫瘤をみとめ胃癌の診断の下に胃切除術を施行した。組織検査の結果硬性癌であつた。

一般に若年者胃癌は極めて進行が速く予報が不良とされている。本症例も再発の予防の為レントゲン深部治療を行つて経過を観察中である。

## 6. 小腸軸転の1例

岐阜医大第1外科 渡 辺 祥

84才の男子、4日程前より何等誘因なしに嘔吐を伴なつて腹痛、便秘を来し治療により好転せず来院した。体格中等度、栄養状態やや不良、顔面苦悶状、脈搏80整、緊張良好である。腹部は全体に膨隆し、蠕動不穩、金属性有響音、直腸膨大部の拡張及びレ線写真にて膨隆した小腸ガス像ならびに鏡面形成像を認める。赤血球340万、白血球11,500 Hb-量(ザーリー)70%。開腹により回腸末端部の反時計方向360°の軸転を認めた。虫垂に発赤、腫脹はないが線維性被膜に被われ、また回腸末端は腸間膜との間に索状の癒着を認めた。腸管整復、癒着剝離を行ない、術後経過良好である。

以上虫垂炎の癒着により発生したと思われる小腸軸転の症例を報告するとともに、2, 3の文献的考察を試みた。

## 7. 上行結腸軸転の1例

岐阜医大第1外科 柴 田 正 敏

73才男子で腹痛、悪心、嘔吐、腹部膨満を来し Ileus の診断にて開腹し、上行結腸軸転であつた一例を経験したので報告した。

既往歴 約12年前腹部を強打し腸管破裂の診断にて開腹術を受けた事がある。

開腹時所見 下腹部副正中切開で開腹すると腹腔内に小量の緑色の腹水を認めた。総腸間膜症を伴う移動性に富んだ盲腸及び上行結腸が、その中部で上位腸管の転絡を伴い時計針方向に約180°C 軸転し強く膨満していた。著明な血行障害は認めない。廻腸末端及び小

腸中位で前回手術によると思はれる癒着を認めた。上行結腸軸転を解除し右側壁側腹膜に固定し手術を終る。

本症例は総腸間膜症を伴い前回手術による癒着が誘因となり上行結腸軸転を来し Kunz の分類による第一型と思われる。

## 8. 腎盂乳頭腫、孤立性腎囊胞の症例

県立岐阜病院 石 山 勝 蔵

### 1) 腎 盂 乳 頭 腫

43才女。1週間前より強い血尿を訴えて入院。逆行性腎盂撮影にて左腎盂乳頭状腫瘍と思われる像を認め、左腎尿管全摘出術兼膀胱壁切除術を行い、引続き Co<sup>60</sup> の照射を行つて全治退院した。組織学的には乳頭腫。

### 2) 孤立性腎囊胞

47才女。1週間前に右側腹痛を訴え、薬に腎腫を指摘された。逆行性腎盂撮影にて右腎盂腎杯の圧迫像を認め、腎摘をしたが、鷲卵大の囊腫であつた。

腎盂腫瘍の際に腎摘に止めず、腎尿管全摘出兼膀胱壁切除術をすべきことを強調し、腎腫瘍と腎囊胞とのレ線学的鑑別診断につき述べた。

## 9. 卵巢奇形腫の1例

岐阜医大第1外科 原 節 雄

患者は46才、既婚、経産婦で、昨年より、生理的出血は不整となるも、他に自覚症状なし。本年1月9日朝、突然、腹部全体に激痛。続いて悪心、嘔吐、発熱、限局性下腹部激痛、腹部膨満感、便秘等を来して来院。

諸種検査の結果、成人手拳大なる左卵巢囊腫の茎捻転と診断し、手術を施行するに、腹腔内には、脂肪質に富める、淡黄、漿液性の腹水少量が存在し、子宮前位に、卵巢門軸と平行に180度捻転せる卵巢囊腫を認む。腫瘍は単房性、単発性、内容は12纏程度の黒褐色毛髪多数と、帯黄褐色粥状の脂肪で、卵巢門附近に、拇指頭大の実質突起一個があり、突起表面には毛髪、断面には犬歯様歯牙一個と、白色の硬骨を認む。本症例は皮様囊腫、所謂卵巢奇形腫の典型に属するものであるが、治験例と共に、多少の文献的考察を加えて記載した。